



## Contents

- P. 1 「気候変動と自然災害に関する講演会」開催報告
- P. 2 「前海を考えるシンポジウム」開催報告
- P. 4 スタッフ離任の挨拶

## 「気候変動と自然災害に関する講演会」開催報告

2月6日に、小松利光先生（九州大学特命教授）をお招きし、講演会「気候変動下の自然災害に対する実践的適応技術の開発」を開催しました。

小松先生は環境水理学がご専門。日本学術会議水・土砂災害分科会の委員長を務める、水・土砂災害の第一人者です。佐賀大学理工学部6号館2階の多目的セミナー室で行われた講演会には30人を超す方々が参加し、熱心に耳を傾けていました。

小松先生は、気候変動と災害について、平成24年に発生した北九州北部豪雨や26年に発生した広島市の土砂災害など、多くの事例を示しながら「現在の災害外力と防災力の間にはギャップがある」と警鐘を鳴らしました。そして、気候変動の進行下にある現在では気候変動の進行に伴って災害外力を再評価し、必要な適応策を実施することで被害を緩和できるという「順応的適応策」について語りました。この順応的適応策は（1）周辺の自然環境と調和できること、（2）柔軟で調整可能な技術であること、（3）必要であれば後戻りすら可能であること、そして（4）効率的で経済的であることが大事であるとまとめ、堤体の下方に穴を開けた流水型ダム、小規模ダム群などの事例や有効性を紹介しました。



会場の様子

河川事務所関係者など30人が参加しました

講演後の質疑応答では会場から多くの質問が寄せられました。「『想定を超える力』をどのように捉えるのか」という質問を受け、国で予測を統一して発表し、五年毎に見直すような仕組みを作っている国の事例を紹介しながら、「日本もこのようなシステムを取り入れていくと良いのでは」と提案しました。最後には“Tomorrow I will live, The fool dose say: today itself's too late; the wise lived yesterday. (明日は何とかなると思うのは愚か者。今日でさえもう遅すぎるのに。賢者は昨日のうちに済ませている。)”というアメリカの社会学者、チャールズ・クーリーの言葉を引用しながら、「佐賀県に代表される低平地はリスクの高い土地。すぐにでも災害に関する問題に取り掛かってほしい。」と激励しました。

この講演会は、当センターの山西教授が所長を兼任する佐賀大学地域防災研究所と低平地研究会水専門部会の主催、工学系研究科都市工学専攻と当センターの共催で開催されました。



小松利光先生による講演風景

## 「前海を考えるシンポジウム」開催報告

前海を考えるシンポジウム（略称「前海シンポ」）は、毎年1回開催し、「有明海」の話題を取り上げ、その話題に関係する方々をお呼びして実施しています。今回で3回目となる前海シンポでは、ラムサール条約をテーマに取り上げました。

現在鹿島市では、鹿島新籠干潟をラムサール条約湿地に登録（登録名：肥前鹿島干潟）することを目指した取り組みを行っています。有明海では、熊本県の荒尾干潟が先行して登録されていますが、認定されれば有明海奥部の泥干潟としては、同じく現在登録を目指している佐賀市の東与賀干潟と並んでの登録となります。

シンポジウムでは開催に際し、樋口鹿島市長より鹿島市の取り組みの紹介を含めながら開会の挨拶をして頂きました。続い



開会挨拶をする鹿島市長

て、藤井特任助教により「前海シンポ」の開催意義とテーマ設定の理由などの趣旨説明をしました。その後は「鹿島市」、「漁業者」、「登録湿地にあたる地区代表」、「漁業者」、「野鳥の会」、「研究者」からのご意見を頂きました。鹿島市からはこれまで市が行ってきた行政的な取り組みについての発表がありました。



シンポジウムの様子

た。そのうえで、今年6月のラムサール会議提案に向けて手続きを行っている旨が示されました。有明海漁業協同組合の土井さん、中島さんからは、ラムサール条約登録に対する反対ではないとの前置きのもと、鳥が海苔養殖などの漁業に与えている影響についての紹介がありました。鹿島新籠干潟の近くに住む新籠区区長宮崎さんからは、「ラムサール登録後」の地域の取り組みについてのご意見を頂きました。日本野鳥の会の中村さんからは有明海に飛来する鳥について、有明海の干潟が渡り鳥にとってどの程度重要なのか、ラムサール登録まであるいは登録後のとりくみについてご意見を頂きました。

鹿島市は、「ラムサール条約に登録されることは、鹿島の海の生態系やそこで暮らす人々に大きな関わりをもちます。」と地域に説明してきています。それではどのような地域の活動が必要なのかについて座談会で議論しました。特に、「ラムサール登録」をして何が変わるのか、どのように利用していくのかについて活発な議論を頂きました。また、鹿島市が現在行っている「ツーリズム」などにどのように活かしていけるのかという議論まで展開しました。また、最終的には「ラムサール条約に登録されることがゴールではなく、それを有意義に活かすためには、戦略的な計画と実践活動が重要である」ことを再確認して座談会を終えました。

今回の前海シンポは、関係者を含めて43名と少人数となりましたが、鹿島市長を初めとして活発な発言を頂きました。参加して下さった皆様、有り難うございました。また、シンポジウムの途中では鹿島市立七浦小学校5年生が取り組んだ環境学習について子ども達に発表頂きました。

今回のシンポジウムの様子は、鹿島ケーブルテレビ「かしまんニュース」にて4月15日、16日、19日に紹介されます。



活動紹介をする小学生



## スタッフ離任の挨拶

本センターのスタッフとして活躍して頂いた、長濱祐美研究員が3月末日をもって離任されました。以下、長濱研究員からのコメントです。

皆様におかれましてはお変わりなくお過ごしのこととお喜び申し上げます。さて、私ことではございますが、2015年3月31日をもって佐賀大学低平地沿岸海域研究センターを退職し、4月1日より茨城県霞ヶ浦環境科学センターの研究員として勤務することとなりましたので、この場をお借りしまして、ご挨拶申し上げます。

着任は2013年の10月でした。2年の任期でしたが、1年半での離職となってしまい、申し訳なく思っております。山西先生には、就職活動について多大なご理解を頂き、またサポートもしていただきました。今後の研究を通じてご恩をお返ししていきたいと強く感じる次第です。

センターでの研究に従事する中で、有明海沿岸特有の大きな干満差や非常に細粒な軟泥環境を知ることができたことは、私にとって水環境研究の視野を広げる契機になったと感じています。驚きの連続でもありましたが、今後の研究にもぜひ活かしたいと思えます。また、多くの実験機器のメンテナンスや整備に携われたことも、とても勉強になりました。研究室運営や学生指導では山西先生にご迷惑ばかりおかけいたしました。これらに携わることのできる機会を与えてくださったことに、厚く御礼を申し上げます。また、荒木センター長には、センターの広報活動や国際学会の運営などで、多くの機会を与えていただき、たくさんの経験を身に着けることができました。ありがとうございました。また、センターの先生方、事務員の皆様にも厚く御礼を申し上げます。

4月からは、日本第二位の面積を誇る湖、霞ヶ浦のアオコ発生に関わる研究に従事いたします。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお祈り申し上げます。皆様のご活躍とご発展をお祈り申し上げ、離任の挨拶とさせていただきます。



長濱祐美研究員

### 編集後記

佐賀大学の構内はさくらが満開に咲いており、春が来たことを知らしています。一年が経つのははやいものです。今年度のニュースレターは、主に行事の報告をしてまいりましたが、来年度は、当センターで活躍する様々なスタッフの取り組みを紹介出来ればと思っておりますが、果たして予定通りいくかどうか。来年度もどうぞよろしくお祈り致します。（藤井）

（編集担当：藤井、木梨、長濱）

### 発行・編集

佐賀大学低平地沿岸海域研究センター  
〒840-8502 佐賀市本庄町1番地  
TEL 0952-28-8582 0952-28-8846  
FAX 0952-28-8189 0952-28-8846  
ホームページ <http://lit.saga-u.ac.jp>  
(平成27年3月31日発行)